

C-23 近世以降に於ける農民服飾の研究——被服工作上よりみた労働者(二)
和洋女大文家政 鷹司繪子

目的 近世期に至るまで、常民服飾は各々その環境に適した独自の発達を遂げて来た。その特性は風土性・機能性・経済性にある。更に、農耕生活は交流が少く孤立的に文物を育てたから衣服にあつても地域的な差異がみられるのである。農村における衣服縫製に関する研究は、こうしたことを明らかにすることによって、彼等の生活の中での衣料にみる創意工夫を考察し、ひいては農村社会における文化流通ルートを究明することを目的とする。本年は先年の東北地方に続くものとして関東地方をとりあげた。

方法 本学服装史研究室で施行を続けている農民服飾の調査報告・雛形・採集標本・先年文部省史料館で採寸を許された同館収蔵資料・各地緊急調査報告を主な資料として使用した。

結果 関東各地にみられる縫製上の特徴を明かにした。一般に、先年の東北各地のものに比して縫製の簡易で、中でも下衣の袴の裄の種類は著しく少い。このことは一部式服飾構成も異なる風土に於いての、袴の伝統の相違がうかがわれるのである。しかし埼玉巣ヶ里や都下青梅にみる縫製はさきの袴の工夫の様子、なほその経済的工夫をふまえてなかつたことは云ふまでもない。それ故にこそ袖明小袖にみられる様な袖中から衿をかく裁断の盛んに行われたものであろう。他に下衣で古代の袴の如く前後を一糸の紐で連ねた特異な例がみられた。